

12月2日ゼミは2本立てです**修験道について**

—12月2日ゼミ要旨—市川 達雄会員記—

はじめに

新米の社会人として北九州に赴任して数年たったころ近くにある求菩提山という霊山に登り、そこで修験道というものに初めて触れました。しかし特に興味をもって探求するまでには至りませんでした。それから十数年後東京に転勤して間もなく、たまたま古書店で和歌森太郎氏の「修験道史研究」が目にとまり買い求めましたが、時間的余裕もなくそのまま放置していました。退職して時間的余裕も出きたので、改めて該図書に目を通し、更に関連図書にも触れてみて、日本人の生活習慣を理解するのに参考となる点が多く含まれていることが理解できました。その内容を共有させて頂ければ幸いです。

修験道に関する研究について齊藤英喜氏は、「明治5年の修験道禁止令により近代では公的に排斥、消去された。学問的研究が本格的にスタートするのは戦後になってからで、活発化するのは1970～80年代になってからである。嚆矢となったのは和歌森太郎の「修験道史研究」（昭和47年初版）である。それより前、柳田国男や折口信夫は、日本人の信仰を総体として担っていたのは寺院に所属する僧侶（仏教）や神社祭祀に携わる神官・神職（神道）ではなく、消し去られた周縁的な民間宗教者だと結論付けていたが、それが再評価された時期とも一致している」と述べている。

また修験道について徳永誓子氏は、「日本古来の山岳信仰が密教の影響を受け平安時代に成立した、というのが百科事典などにみられる一般的理解であるが、再検討が必要である」としている。

1、修験道概観

和歌森太郎氏は上述の図書で修験道に対して次のような推移を究明するとしている。

①修験道的なるものが、一般の民族的信仰や仏教教団修行の中に混融して、それ自身の姿を明らかにしなかった状態。

②平安末より鎌倉期にかけて独立した山伏が理想的祖師として役行者を戴き、その外貌と行動の独自性を以て山伏社会の存在を顕わにし、往々、ことに修業にさいして団体的な山伏衆を成した修験道第一次成立の状態。

③これらの山伏衆が室町中期に教派的形態をとった山伏社会に規制されるのを常とするに至った第二次成立の状態。

修験道の研究は多かれ少なかれこの考えをベースとして批判、肯定を交えながら展開されてきた。

最近の見解として、鈴木政崇まさたか氏が修験道を総括的に述べたものを下記する。

「修験道とは山で修業して神霊と交流し、自然の特別な霊力の「験」を身につけ、里に下って験力や法力によって加持祈祷・病氣治療・ト占託宣などを行う信仰形態である。修験道のように山岳修行を体系化した実践は、他の国には見られない。特徴は単独に山だけではなく、峰々を縦走して行場や拝所をめぐる峰入り（徒擲とそう）を根幹の行法に据えていることである。実践者を修験者や山伏といい、半僧半俗の妻帯者が主体で民衆には身近な存在である。護摩・火渡り・刃渡りで験力を誇示する。火の操作は修験の特徴である。

修験道は、山岳信仰を基盤として、仏教や道教、陰陽道、巫術などを取り込んで展開し、「権現信仰」を中核に神仏習合を維持してきた。原型は奈良時代の聖や禅師などの山岳行者で、平安初期に山岳仏教の天台宗や真言宗などの密教の影響を受け、平安時

代後期に吉野や熊野で発展した。鎌倉時代には役小角えんのおづぬが開祖に祀り上げられ、「修験」から「修験道」へと体系化された。室町時代後期には教義・修行・思想・組織が整えられて教団化した。中世（鎌倉・室町）には各地を遍歴し移動性が高かったと推定される。『勸進帳』の義経や弁慶のように諸国を自由に往来し、情報伝達者として活躍した。日本各地にも霊山が成立して修行が行われた。江戸時代には京都の聖護院しょうごいんを中心とした本山派（天台系）と醍醐三宝院さんぼういんを中心とした当山派（真言系）に組織化され、大峰山と羽黒山と英彦山が三大修行場となった。一般庶民においても講を組織して霊山に上る信仰登拝が盛んに行われ、山麓には多くの信仰集落が生まれ経済的に繁栄した。また修験者は里に定住して、「里修験」として病気治しや日々の悩みの解消、薬の処方など民衆の身近な「野のカウンセラー」として活躍した。しかし、明治初期には神仏分離政策がとられ、神仏混合の修験道は解体された。」

これに少し優しい言葉で付け加えると、日本人は古来、山に対し畏怖の念を抱くとともに、自分たちの力では理解できない何かが存在すると感じ崇拝の心を持っていました。そんな山に対し深く分け入って修行を積み、霊力を獲得しようとする人々、いわゆる山人がいました。山伏あるいは行者と呼ばれました。彼らはまた山での修行を通じ呪力を有するものとして庶民に知られるようになり、呪力をもって人々の苦悩を解決してくれるものと期待されました。一方仏教が伝来し、特に新密教が普及すると同時に山で修業する仏徒たちも増えます。山伏は密教の呪術を取り入れます。

山伏たちは僧と言う組織に組み込まれ集団をなしていきます。このころに山伏に対しての修験者、更には修験道と言う呼び方が発祥したものと考えられます。その成立時期については平安時代中期から末期、あるいは鎌倉時代初期と言われますが、確固たる定説とはなっていないようです。ここでは修験道に対する現状での理解、見解を知り得た範囲で紹介したいと思います。

2. 修験ならびに修験者、修験道

修験、修験者、修験道という言葉の意味とその発祥時期について述べます。

3. 修験道の歴史

上記 1. で述べた内容をベースに時代を追って詳述します。奈良・平安時代(上代)、鎌倉・室町時代(中世)と近世以降に分けて、山への信仰から修験道へといかに発展したのかを吉野、熊野を中心として、具体的には政治、社会、宗教などとの関係を含めながら山伏集団から修験道として体制が整うまで、そしてその体制が政府の影響などで崩れ現在に至るまでを述べます。その中では、役小角、空海などにも触れます。

4. 修験道と火

火は修験道にとって大切なものですが、ここでは不滅の法燈について述べます。

5. 修験道と鬼

修験道は山への信仰がベースにあるため鬼とも深い関係があります。

6. 修験道と天狗

天狗は山に住み、山伏も山に伏して修業する；天狗は妖術を使うが、山伏も山で修業して様々な術を使う；天狗は医術を使うが、山伏も修験道の行者として病人の治療に携わった；天狗は快音を発するが山伏も修行中に奇声を発する、などの点から江戸時代、庶民は修験者を天狗そのものと受け取るようになり幅広い帰依をみつめます。

日本における天狗という概念の歴史にも簡単に触れます。

7. 修験者（山伏）の服装

山伏の姿は基本的に不動明王にかたどった服装を身に着けます。これは密教の「即身成仏」という教理をあらわしています。密教では大日如来と一体になることを説くが、修験道では不動明王と一体になるとします。役行者に関する伝説から修験道の本尊は蔵王権現とされ、それは大日如来の教令輪身（きょうりょうりんしん、強制的な教化説法の変身）である不動明王の化身と考えられています。このことから山伏が身に着ける物の意味するところを簡単に述べます。

8. 修験道と美術

仏像、曼荼羅、山寺について修験道との関連を述べます。

9. 修験道と芸能

神楽、田楽、猿楽、舞楽などと修験道の関わりについて簡単に述べます。 以上。

倭国と日本国

—12月2日ゼミ要旨—鈴木 慧会員記—

現在の日本は、かつて中国や朝鮮半島の諸勢力から倭と呼ばれていました。10世紀に書かれた旧唐書、11世紀に編纂された新唐書に倭は日本に変わったと出てきます。倭から日本へいつ変わったのか、倭と日本との関係はどうなっているのか、変わった理由はなにか、そのあたりについて以下の項目に沿って紹介してまいります。

1. 新旧唐書記載文

2. 中国にみる倭

・山海経、漢書地理志、後漢書東夷伝、魏志などに記載の倭

・倭とは何か、どんな意味があるのか・倭の指す地域は、朝鮮半島南部を含んでいたのか

3. 5世紀の中国、朝鮮における倭

・宋書倭国伝、三国史記新羅伝、広開土王碑、 栄山江流域の前方後円墳

4. 5～6世紀の日本

・磐井の乱

5. 記紀にみる「倭」

6. 書紀にみる中国との国交

7. 日本への変更時期

・隋書倭国伝、書紀推古紀、釈日本紀などの記述

8. 「日本」の意味、由来

・中国は日本を含むこの地域をどのように見ていたか

結論、以上の諸資料から考える合理的結論と残された課題について。以上。

ゼミ会場と時間13:15～16:50

- 1、全水道会館（水道橋駅）・中会議室（5階）
- 2、JR水道橋駅東口（お茶の水寄り）、又は、都営三田線下車徒歩1～2分。
- 4、電話番号：03-3816-4196

日本語の源流その2

—磐城 妙三郎会員記—

1. 環日本海諸語

最近、言語学者で元日本言語学会会長松本克己氏の日本語系統論を読んだ。『ことばをめぐる諸問題（言語学・日本語論への招待）三省堂 2016年』氏は「もっぱら語彙レベルの類似性に頼るという在来

の方法では、日本語の系統問題はこの先百年続けても、おそらく解決の見込みはないでしょう。」と断言し、試行錯誤の結果「言語類型地理論」という手法を提案している。詳しくは著書を参照されたい。また「比較言語学の手法でたどれる言語史の年代幅は、大体、5～6千年前あたりがその限度と見られています。インド・ヨーロッパ祖語、オーストロネシア祖語、シナ・チベット祖語などの推定年代は5～6千年前あたりの線ではほぼ一致しています。—中略— 結局のところ、系統的孤立言語の系統関係が従来の比較言語では手の届かない遠い過去にまで遡るという意味にはほかなりません。」として系統的孤立言語とされている日本語は5～6千年前より以前に成立した言語であり、比較言語学では手の届かない言語であると説いています。すなわち日本語の成立は縄文時代に遡るということになります。ユーラシアには系統的孤立言語とされるものが10個近くあり、その半数近くの日本語、アイヌ語、ギリヤーク（ニブフ）語、朝鮮語が日本海を囲む日本列島とその周辺に集中しており、氏は「北の方からアムール下流域から樺太にかけて分布するギリヤーク語、日本列島のアイヌ語と日本語、そして朝鮮半島の朝鮮語がひとつのグループとして纏まります。」として、これを「環日本海諸語」と名付けています。つまり日本海を囲む日本列島とその対岸にはおそらく言語的に孤立した四つの言語集団が存在し、現在まで継続しているということになります。ちなみにこの地域の主な言語はツングース諸語ですが、その祖語の成立は紀元前3千5百年以降と推定されています。

2. 環日本海文化圏

2021年7月に北海道・北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産に登録されました。北海道南部及び津軽海峡を挟んだ東北地域に所在する遺跡群は紀元前13,000年から紀元前400年までの間に、北東アジアで発展した狩猟・漁労・採集社会による定住の開始、発展、成熟と時代を共有しています。日本海を挟んだ対岸となるアムール川流域のオシポフカ文化、マリンスコエ文化、ルドヤナ文化などが、遼河流域とその支流の興隆窪文化、紅山文化などがそれにあたります。これらの遺跡からは共通する出土物として平底円筒型土器や珧状耳飾りおよびヒスイの玉製品が発見されています。また住居跡も竪穴式構造

であることも共通しています。多くの巨大集落も散見され、集落の中央に100平方メートルをこえる大型建物を伴うものもあります。日本列島では東北地方を中心に33遺跡で90棟以上の大型建物が知られており、東北から北陸まで分布しているそうです。

これらのことから「環日本海諸語」と同様に「環日本海文化圏」の存在が想起されます。日本列島へは後氷期以降温暖化が始まる紀元前7000前くらいまで間宮海峡、宗谷海峡さらに津軽海峡が氷結する期間があり、アムール川下流域から徒歩で数次にわたり日本祖語やアイヌ祖語を話す集団が渡来し、日本列島を縦断して琉球列島まで拡散したと考えられます。

3. 縄文語は日本祖語、弥生語は京阪方言の祖
松本氏と同様に言語学者で元日本言語学会会長を務められた小泉保氏の著書に『縄文語の発見 1998 青土社』があります。氏は「縄文語、弥生語交代説は憶測であり縄文語と弥生語は連続的に継続している。縄文語の研究は手つかずという状態にある。」と述べています。縄文語とは縄文時代の言語、弥生語とは弥生時代の言語と定義し、最古の文字資料が残る上代日本語の祖語を弥生語とする従来説を否定するものです。「日本語は南の琉球から北の東北地方に至る同系の方言群から成り立っている。こうした日本語の諸方言の間に比較言語学的手法を適用することは可能である。本土縄文語には九州方言、関西方言、関東方言、東北方言があり、琉球縄文語には奄美方言、沖縄方言、宮古方言、八重山方言があったと考え、本土縄文語と琉球縄文語を比較して原縄文語を再構成することができる。縄文晩期の時点では本土縄文語は裏日本方言と表日本方言それに九州方言に大別できるのではと考えている。また九州縄文語から琉球縄文語が分派したと推測される。そして、北九州に侵入してきた渡来人が、九州縄文語を基にして弥生語を作り出したというシナリオを描いている。」として以下の持論を展開しています。「地域言語学」として現代の方言に残された特徴の分布を通して過去の言語状況とその内容を推測して、現在では縄文語が東北（弁）方言で代表され、弥生語は関西（弁）方言で代表され、中間の福井、石川、富山、新潟は関西方言の勢力下でありながら東北弁的性格を保持するとしています。さらに金田一晴彦氏の説を引用して、日本語の諸方言

のアクセントは、大きく三つの類型に分けることができ、第一は、東京式、第二は京都・大阪式、第三は一型式（無アクセント：八丈語ならびに東北地方、九州地方の一部の方言）であるとしています。また藤堂明保氏の説を引用して、京阪式アクセントから「高（高く平らな拍）、低（低く平らな拍）、上昇（低から高に上る）、下降（高から低に下る拍）」という音の変動を見取ることができるとしています。中国語の音韻論にも同様な声調が認められるそうです。こうした京阪式アクセントと中国語の音韻との対応から、弥生時代当初の渡来人は中国的四声を備えた言語を話していた人々ではないかと想定し、裏日本縄文語は本来無アクセントであったから、ここに弥生語は極めて特異な性格を帯びるようになったと考え、八母音（五母音+キ、エ、ヲ）に四声アクセントがかぶさった弥生語は奈良時代まで引き継がれてきて、いわゆる「上代特殊仮名遣」として残されたと説明しています。さらに縄文時代の人口は東北と関東に集中していたから裏日本縄文語が当時の代表といえ、九州縄文語は周辺的な立場に立たされており、こうした関係が逆転するのは、渡来人の移住により九州型を中核とした弥生語（表日本方言＝京阪方言）が政治勢力の通用語となってからだとしています。

4. まとめ（仮説）

系統的孤立言語である日本祖語の成立は紀元前3,000年よりかなり以前の縄文時代に遡り、その縄文文化は北東アジアで発展した狩猟・漁労・採集社会による定住の開始、発展、成熟の過程を同一にする。紀元前13,000年から紀元前7,000年にかけてアムール川河口から樺太島、北海道を経て日本列島へ移住し、東北地方を中心に関東地方、北陸地方、九州地方へ拡大した。現在の東北方言などに似た無アクセントが主流であったが、紀元前1,000年前後に北九州から山陰地方にかけて中国的四声を備えた言語の渡来人がきて、縄文語と接触し、現在の関西方言の基となる弥生語が形成され、やがて畿内政治勢力の通用語となる。東北地方、北関東地方には現在の東北・北関東方言の基となる縄文語が継続していると考えられるのではないだろうか。未完。

次回1月13日ゼミ・テーマ

古事記の謎—小川 孝一郎会員